

Interview
ドキュメント
生きる

外 資系証券会社の金融マンだった大久保淳一さんが、がん倒れたのは42歳の時のこと。ステージⅢbの精巣腫瘍を患いながらも、手術と抗がん剤治療により奇跡的に生還。6年後には究極のマラソンといわれる「サロマ湖100キロウルトラマラソン」に再挑戦し、見事完走した。今は社会事業としての患者支援を日本に根付かせるべく奮闘している大久保さんに、闘病生活を語ってもらった。



非営利社団法人5years.org代表

お お く ぼ じ ゅ ん い ち
大久保 淳一 さん

**突然のガン告知
「5年生存率49%」という厳しい現実**

米国ビジネススクールでMBAを取得。外資系証券会社で活躍する傍ら、“ウルトラマラソン”の異名を持つ100キロマラソンで何度も完走した。自らの成長を追求し、高みを目指して走り続けてきた大久保淳一さん。体の異変に気づいたのは、2007年3月、骨折の治療で入院していた時のことだ。退院間際のある夜、右の睾丸が小石のように萎縮していることに気づいた。翌朝、担当医に知らせると、すぐ泌尿器科に行くよう指示された。「がんの疑いがあります。精巣腫瘍です」

突然の告知に、大久保さんは耳を疑った。緊急手術を受けたが、病理検査の結果、3種のがんが混合した難

治がん判明。腹部と肺、首のリンパ節に転移も見つかった。診断は最終ステージのⅢb。「5年生存率49%」という現実、大久保さんは打ちのめされた。

**がんを克服した人の存在が
心の支えに**

「治療で半年も休めば、解雇されるかもしれない。万一助かっても、もう社会で活躍できない人になってしまう。42歳で人生の下り坂に入ったかと思うと、つらかったですね」

そんな時、心の支えとなったのは、主治医が教えてくれた自転車選手ランス・アームストロングの存在だった。25歳と若くして精巣腫瘍を患った彼は闘病で病を克服し

**「がん＝人生下り坂」ではない、
病を乗り越えて人生の高みを目指す**

年表		Profile
1964年	長野県で生まれる	
1999年	シカゴ大学ビジネススクール修了 外資系証券会社に就職	
2007年3月	精巣腫瘍が発覚・手術	
2007年4月	抗がん剤治療を開始	
2007年7月	間質性肺炎を併発し、治療を開始	
2007年8月	腹部の腫瘍のリンパ節郭清	
2007年11月	退院、自宅療養開始	
2009年	職場に完全復帰	
2013年	サロマ湖100キロウルトラマラソンに再挑戦し完走	
2014年	証券会社を退職	
現在	5yearsの運営に従事する傍ら、 執筆や講演活動を行っている	
一般社団法人 大久保の会 5years http://5years.org		
著書に『いのちのスタートライン(講談社)』		

た。後にドーピングが発覚して、タイトルははく奪されたが、大久保さんにとっては同じがんを克服したヒーローである。「『がん＝人生下り坂』ではない、がんを乗り越えて人生の高みに上ることも不可能ではないと私に教えてくれた。本当に勇気づけられました」

**度重なる試練を乗り越え
100キロマラソンを完走**

4月から抗がん剤治療を開始。副作用には苦しめられたが、薬剤の効果は劇的だった。第1クールで全腫瘍マーカーが正常値に回復。CTに映った腫瘍の残像を取り除くため、手術で腹部リンパ節を郭清したが、リンパ節の腫瘍はすべて壊死していた。がんの治療は終了し、大久保さんは家族とともに、東の間の幸せをかみしめた。

だが、自宅療養中に薬剤の副作用で間質性肺炎が悪化。一時は生存率20%ともいわれるほどの危機的な状況に陥り、大久保さんは死を覚悟した。幸い、病状は快方に向かい、11月末に退院。職場に完全復帰したのは2009年夏のことだ。退院後はハーフマラソン、フルマラソンを次々に完走。2013年にはサロマ湖100キロウルトラマラソンで見事完走という快挙も達成した。

「病気を境に人生が下り坂になるなんて、絶対に許せない。世の中には80、90歳になってもスポーツで道を極めている人がいます。私も80歳で人生のピークを迎えたい。後半の人生に対するモチベーションを強く持てたという意味では、病気になって良かったな、と思います」



**希望さえ持ち続ければ
試練は必ず乗り越えられる**

2013年10月末に非営利社団法人5years.orgを設立し、社会事業としてのがん患者支援活動に着手。昨年2月末にWebサイトを開設した。これは、がんサバイバーが病歴や治療歴、社会復帰歴や現在の状況をネットで公開する一大データベース。テレビ会議システムを使って患者同士が交流できる。現在の登録者数は1,300人。今後5年間で登録者を10万人まで増やしたい、と語る。

「人間、どんなに真っ当に生きていても、急に真っ暗なトンネルに入ることがある。でも、希望を持ち続ければ、試練は必ず乗り越えられるはず。人生にはいつでも何度でもチャンスがある。それを自分で証明したいのです」

Episode

**深い海底に落ちていく自分を
保険が支えてくれた**

がんになると、仕事や家族、健康等何もかも奪われてしまいます。そんな時、唯一与えられたのが保険金で、深い海底に落ちていく自分を支えてもらったような気がしました。給付の件で保険営業の方に電話した時、「保険金をお支払いできることが、私たちの幸せです」と言われたことが今でも忘れられません。精神的にまいっている時だけに、その言葉がすごく響いた。保険業とは人助けの仕事だ、と実感しました。